はしがき

井波　律子

本書は二〇〇一年四月から二〇〇四年三月まで、三年間にわたっておこなった共同研究「表現における越境と混淆」の報告書である。この共同研究は、私にとって「文学における近代―転換期の諸相―」（九六年度―九九年度）につづいて、日文研でおこなった二回目のものである。

専門を異にする参加者のいきいきとした知的交換、刺激的な知的交流の場を作ることができればと願い、今回は前回よりもさらに幅を広げた題目を設定した。参加者はまことに多士済々、理系から「文転」した人、音楽家と文章家を兼ねた人、哲学者にしてマラソンランナー等々、みずから「越境と混淆」を実践されている方も多い。

こうして三年、開催された共同研究会はつごう一四回、発表者数はのべ二七人にのぼった。発表内容については巻末の「共同研究会記録」を参照されたいが、多種多様、さまざまな領域からなされた内容豊かな発表が目白押しであり、「表現における越境と混淆」というテーマが、実に多角的にとらえられているさまは、感動的というほかない。共同研究会の現場では、毎回、「目からウロコ」の面白い発表に刺激をうけた、参加者の議論が盛りあがり、文字どおり「学際的」な異分野交流を地でゆく展開となった。

こうした「学際的」にして「実験的」な共同研究が、かくも順調に進行したのは、ひとえに参加者各位のおかげである。また、井上章一氏は前回にひきつづき今回も幹事として、発表者との交渉から研究会の司会等々にいたるまで、一手に引き受け、大活躍してくれた。ここに、彼の大いなる助力に感謝したいと思う。

かくして、最後の仕上げとして参加者に論文の執筆をお願いしたところ、一五人の参加者から快諾をいただき、予定どおり一五編の論文をお寄せいただいた（幹事の井上章一氏と井波自身の論文をあわせると合計一七編となる）。これまた共同研究報告論文集として

は、ほとんど「奇跡的」な成功というべきであろう。

論文集の構成については、

Ⅰ　からだと音楽（五編）

Ⅱ　ことばと言論（七編）

Ⅲ　かたちと美術（五編）

の三部仕立てとした。多種多様とはいえ、おのずとこうして三部構成にまとめあげることができたのは、共同研究「表現における越境と混淆」の成果ではないかと、ひそかに自負しているしだいである。

最後に、お忙しいなか力作を執筆してくださった、青柳いづみこ、池内紀、稲賀繁美、宇佐美斉、長田俊樹、佐伯順子、佐藤卓己、白幡洋三郎、徐蘇斌、鈴木貞美、中村隆文、西川祐子、西村大志、原章二、細川周平の各氏に、心からお礼を申しあげたいと思います。

二〇〇五年一月